

平成 26 年度
入学試験問題（午後）

国
語

注意事項

- ※ 問題冊子は 18 ページまであります。
- ※ 試験時間は 50 分です。
- ※ 開始の合図があるまで開かないこと。
- ※ 答えは全て解答用紙に書くこと。
- ※ 句読点やカギカッコは一字と数えること。
- ※ ページが抜けていたり、印刷が見えにくかったりした場合には、手を挙げて知らせること。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

我々日本人は「もったいない」^①を様々な場面で使用している。『大辞林』（三省堂）によると「もったいない【勿体無い】」は「1」〔有用な人間や物事が〕粗末そまつに扱われて惜おしい。有効に生かされず残念だ。「2」〔神聖なものが〕おかされて恐れ多い。忌むべきだ。「3」〔目上の人の好意が〕分ぶんに過ぎて恐縮きょうしゆくだ。かたじけない。「4」〔あるべき状態からはずれて〕不都合だ。不届きだ、と説明する。

5 用例はそれぞれ「1」が「まだ使えるのに捨ててしまうとはもったいない」「②」「③」「④」「⑤」が「帯紐注1解き広げて思ふことなくおはすることももったいない」^{注2}／『盛衰記』三六」となっている。

総じて、尊いものや価値のあるものが、穢けがされ、粗末に扱われ、能力が発揮されず、本来あるべき状態から離れているさまざまな惜おしみ嘆なげく気持ちを表す言葉であるといえよう。そして日本人は、そのような状態にしないように戒いましめる言葉として「もったいない」を用いている。確かに、マータイ氏注3がいうように「もったいない」には自然や物に対する敬意と愛の意思が込められているように思う。

15 日本人は日常生活の多くの場面で「もったいない」といいながら、物のありがたさに感謝して大切に使い、資源の消費を抑え、不要な物も使い回し、資源を再利用し、そして壊れても直して使ってきた。そしてそれが美徳注5であると称たえてきたのだ。自然の摂理せつりに合う物は美しいものである。この感覚は、大自然を正しく畏おそれ、利用し、そして調和を図ってきた日本人の伝統的価値観から派生はせいした、日本人の心の在り方である。

この感覚は障子しょうじが破れたときの対応に象徴される。日本の家庭では子供が障子を破っても千代紙ちよがみなどを切って張ることで修復される。千代紙で修復された障子は前よりも美しく、また微笑ほほえましいものになる。子供が障子を破ったことを戒めながらも、修繕しゅうぜんした障子の美しさを楽しむ文化がある。一方、欧米では子供が扉を破ったとしても、扉ごと新品に交換される。修繕した物が美しいという感覚は欧米にはない。これが「もつたいない」感覚を持つ社会と持たない社会の違いである。

日本人は古いにしえより万物ばんぶつに神霊しんれいが宿り、人は大自然の恵みにより生かされていると考えてきた。それが自然への感謝の気持ちとなり、「もつたいない」という感覚を持つことにつながった。一方、キリスト教は『聖書』で「神は大自然の管理者として人間を選んだ」と教えており、自然観が日本人のそれとはまったく異なる。

20

⑧ 本家本元である現代日本人は、個人主義こじんしぎや拝金主義はいきんしぎの垢あかにまみれ、日本社会は「もつたいない」とは程遠ほどとおい社会になってしまった。「もつたいない」のほんとうの価値を見出して実践じっせんしているのは、⑨ 欧米人なのかもしれない。しかし、「もつたいない」が異邦人いほうじんによって提唱ていしょうされたことにより、日本人は伝統的価値観を再発見することができた。日本人は、マータイ氏に称賛しょうさんされるに相応あふさわしい感覚を取り戻さなくてはなるまい。

30

古来、日本民族が信仰してきた神道しんどうの価値観によれば、木一本一本、花卉一枚一枚、そして風や波や霧にまで神霊が宿ると考える。そればかりか、人間が作った竈かまどや廁注6にも神霊が宿るとされ、数多くの神々を「八百万神やおよそずのかみ」と称してきた。神道において神とは、主に大自然のことである。

⑩、日本人は大自然に対して感謝の気持ちを抱きつづけてきたのであり、その価値観が「もつたいない」精神の根底に流れているのである。

日本人が物を大切にしてきたのは、物質としての物の価値ではなく、物に神聖性を見出してきたからに違いない。⑪ 米を一粒も残さない日本人の感覚は、食前の挨拶あいさつである「いただきます」に象徴されていることはすでに述べたとおりであ

35 する。「いただきます」は「ごちそうさま」と並んで、英語などの主要言語に翻訳しにくい言葉であり、日本のアニメに英語の字幕が付く場合「いただきます」は「Thank you や I'm eating など」と訳されている。

確かに、敬虔なるキリスト教徒が食前に神に祈りを捧げることがあるが、毎回、食事のたびに祈りを捧げている人はごく少数で、たいていは無言で食べはじめ、食べ終えても無言である。だが、日本人であれば原則として食前食後の感謝を口にする。

39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

45 謝の言葉である。時間の流れのなかで言葉は変わってきたかもしれないが、日本人は縄文時代から一万年以上の間、食事のたびに食材と料理人に感謝の言葉を唱えつづけてきたのである。

平成十七年（二〇〇五）秋にTBSラジオで「給食の時間に、うちの子には『いただきます』といわせないでほしい。給食費をちゃんと払っているんだから、いわなくていいではないか」と学校に申し入れた母親がいたという手紙が紹介され、物議を呼んだ。

50 番組には数十通の反響があり、その多くは親の申し入れに否定的だったものの「いただきます」をいうときに手を合わせることは宗教的行為だという意見や、食堂で「いただきます」をいったら隣のおばさんに「お金を払っているのだから、店がお客様に感謝すべきだ」といわれたという逸話も紹介された。

そもそも「いただきます」は先述のとおり食物そのものに対する感謝の言葉であって、店や料理人への感謝の言葉ではない。

55 いただきます議論でがっかりするのは、感謝する対象が食物ではなく、最初から店（給食の場合は学校）に限定されていることである。現代日本人が食物に感謝する感覚を失いかけているとしたら、日本人の根幹を揺るがす大問題であろう。一方「ごちそうさま」は店や料理人に対する感謝の言葉であるが、代金を払っているのだから店が客に感謝すべきとはいったい何事か。およそ日本人の発想ではない。

60 店と客の関係は対等である。店は客の注文に応じて食事を提供し、その対価として客は金銭を払うのであって、その取引によって両者が利益を得る。もし、客が食事をしなければ、客は食事をしないぶん、財布の現金は減らずに済む。つまり、客は財布の現金を減らしてでも、その店の食事をする決定をした結果、店に入ったのである。しかも、客には別の店に行く選択肢もあつたはずだが、他のすべての選択肢を否定したうえで、その店に入ったのである。出された食事が代金に見合わなくて文句をいうのならともかく、代金を払うのだから店に感謝しなくてよいということにはならない。

（竹田恒泰『日本はなぜ世界でいちばん人気があるのか』（PHP新書）より）

注

- 1 帯紐解き広げて思ふことなくおはすること——「くつろいで、何も心配しないでいらっしやることは」の意。
- 2 『盛衰記』——鎌倉時代に作られた源氏と平家との物語。
- 3 マータイ氏——「もったいない」という日本語とその考え方を世界に紹介したケニア人女性。
- 4 千代紙——紙にいろいろな模様を色刷りにしたものだ。紙人形の衣装などに用いる。
- 5 拝金主義——お金は何よりも大事なものだ、という考え。
- 6 厠——トイレのこと。

問 1 ——線部①に関して、「もったいない」という言葉にはどのような考え方が含まれていると筆者は考えていますか。適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 自然によって人は生かされているという考え方

イ 自然や物を敬い、愛情をもって接するという考え方

ウ 自然のものすべてに神が宿り、その神に感謝するという考え方

エ 自然は人間が管理しているので、好き勝手に再利用しようという考え方

問 2

②・③・④に入る用例として最も適切なものを、次のア～ウの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア 神前をけがすとはもつたない

イ 御心づかいもつたないなく存じます

ウ あんな有能な人物を放っておくのはもつたない

問 3

線部⑤「美德」の対義語として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 汚点

イ 善徳

ウ 尊大

エ 悪徳

問 4

線部⑥「これが『もつたない』感覚を持つ社会と持たない社会の違いである」とありますが、この違いを説明した次の文の空欄 X・Y に適切なことばを入れて、文を完成させなさい。

日本では X (十五字以内) が、欧米では Y (十五字以内) という違い。

問 5

線部⑦「それ」とは何を指していますか。一語で答えなさい。

問 6

⑧・⑨・⑩に入ることばとして最も適切なものを、次のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア むしろ イ このように ウ したがって エ ところが オ そのうえ

問 7

⑪ には次の四つの文が入ります。意味が通るように文を並べ替え、その順番を記号で答えなさい。

ア でなければ、箸、布団、便所などに「お」という丁寧語を付けて呼ぶことはしないだろう。

イ そして現実に現代日本人の多くは、ご飯茶碗に米を一粒も残さずに食べる習慣を身に付けている。

ウ これは物質としての米の価値ではなく、神からの賜り物である米の神聖性によるからである。

エ 日本の子供は「米を一粒でも食べ残すと目が潰れる」と教えられて育つものだが、一粒も残してはいけないというのは、欧米人には理解できないかもしれない。

問 8

⑫ に入れることばとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 命を奪う儀式 イ 命を再生する儀式 ウ 命を交換する儀式 エ 命を恵んでもらう儀式

問 9

「いただきます」と「ごちそうさま」とのことばの意味の違いを説明した次の文の A・B に入れることばとして最も適切なものを、後のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

「いただきます」は A に対する感謝の言葉であるが、「ごちそうさま」は B に対する感謝の言葉である。

ア 店 イ 神 ウ 万物 エ 食物そのもの オ 食材の生産者や料理した人

問 10

——線部⑬に関して。なぜ「日本人の根幹を揺るがす大問題」になるのですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 食物への感謝の気持ちを失い、店や学校といった対象に限定して感謝するということは、金銭の感覚が日本人の意識の大きな部分を占めることになり、拝金主義を広めることを意味するから。

イ 日本人は昔から自然のすべてに神が宿ると考えているが、その自然からとれる食物に対して感謝する気持ちを失ってしまふということは、日本人自身の大本を失ってしまうことを意味するから。

ウ 食物は人間の生命を維持していくために必要不可欠なものであり、その食物への感謝の気持ちを失うということは、自分たちの生命を維持していくことが難しくなっていくことを意味するから。

エ 食物に感謝する気持ちを失うということは神への感謝の気持ちも失うということであり、昔から万物に神霊が宿るといふ迷信を信じてきた日本人が理性的な考え方に進歩したことを意味するから。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

伸彦さんと翔君の父子家庭と麻子さんと綾ちゃんの母子家庭とは、クラスでの参観日以降、似た境遇からつきあいが始まっていた。四人は一緒にバードウォッチングを楽しみむ仲だったが、秋にバードウォッチングをしている際、麻子さんに想いを寄せる伸彦さんは子供たちが離れていた時に麻子さんを抱き寄せ、唇を重ねた。その日を境に、二家族はクリスマスをしたり年賀状のやりとりをしたりはするものの、麻子さんからの電話はなくなってしまう、伸彦さんはバードウォッチングからも遠ざかってしまった――

伸彦さんには自分の進むべき方向が見えなくなっていた。胸のなかには確かに、これ以上の気持ちを育んではいけないと諫める声があった。でも、その抑制がこれからの自分と翔君にふさわしい判断なのかと問うと、答えは出てこないのだった。

翔君のそばには、逝ってしまった母親の幻影だけがあるべきなのか。肝心の翔君はどう思っているのか。いや、自分自身はどうなのか。あるいは綾ちゃんを我が子にすることに關して、どれほどの自信があるのか。

5 わからなかった。否定できない情熱と、それを消そうとする自分が絡み合ったまま、何ひとつ答えを出せずに日々が過ぎていった。

そして季節はまた動いた。それは想像もしていなかったところから、避け切れない力となつてやつてきた。

こんなことがあるのかと、伸彦さんは会社を恨んだ。組織の一員として生きること、今度ばかりはやめてしまおうかとすら思った。まる二晩、伸彦さんは眠れなかった。何も知らずに寝息を立てている翔君を見ながら静かに泣いた。

10 「翔、そろそろカモを鰯に行かないとな」

こう話しかけたのはその翌朝、二人でトーストを食べている時だった。眠ねむそうな顔の翔君は、「いつ？」と訊きき返した。

「いつって……今度の日曜かな」

はーん、とあくび混じりの返事をし、翔君は朝刊の天気予報欄を見た。

「わっ。お父さん、雪のマークついてるよ。日曜日。やった、雪だ！」

15 翔君は椅子いすから立ち上がって万歳ばんざいし、「綾ちゃんも誘っていい？」と電話をかける真似まねをした。伸彦さんは「おう。綾ちゃんのお母さんにもまたきてもらおう」と言った。

雪はちらつくというより、本降りほんぶりになりつつあった。テントを覆おほうように積もり始めたのが、内側から見ていてもわかった。

「カモ、去年はここよりもずっと下流で待ちましたよね」

20 麻子さんがテントを指先さきで叩たたき、覗のぞき窓についた雪を落とした。

「あの時は場所もわからなかったし、望遠レンズもろくなものじゃなかったです。迷惑をかけましたね」

「ちつとも。だって、あれから私たちも引き込まれていったんですから」

「しかし……こんなに降ってくるとは思わなかったなあ。子供たちはかえって喜んでるけど」

そう言つて外を指さす伸彦さんの前を、翔君と綾ちゃんのはしやぐ影が横切った。伸彦さん④は苦笑して麻子さんを見た。麻子さんも笑っている。子供たちはついさつき、雪で遊びたいと言いだして外に出たのだ。

「寒くないですか？」

「ええ、今日は」

麻子さんは膝掛ひざかけの上でコンパクト凶鑑を開き、様々なカモを見比べている。

「オナガガモとかもくるかしら」

30

「群れがやってくれば、混じると思うんですけどね」

子供たちの声がテントから遠くなった。川原の石の上に積もった雪を集めては投げ合っている様子だった。

「あの……実は残念なことを伝えなくてはならなくて」

それを言うべき時なのかどうかはわからなかったが、伸彦さんはテントに沈黙が訪れたのを機会に淡々と喋りだしていた。

35 「うちの会社のやり方っていいですか、僕は今度ばかりは本当に悩んだんですが、転勤が決まったんですよ。関西の方へ異動
することになりました。春になるともう、こういうこともできなくなります。これまで本当に、ありがとうございました」

⑥ 「どうして……」と言ったきり、麻子さんは絶句した。そして「綾が悲しみます」と、それだけをやつと口にした。

伸彦さんは麻子さんに顔を向けず、覗き窓に目をあてがった。まだほんの数羽だったが、葦原の方にカモが舞い降りるのが見えた。

40 「それで……僕の勝手な気持ちなので、聞き流していただいて構わないのですが」

「はい」

「子供たちも仲良くなったことですし、カワセミやオオルリなど、いっしょに青い鳥を観た仲です。今後もできれば、縁を切らずに付き合っていただけませんか？」

顔を見ずとも、麻子さんが大きく息を吸い込んだのが伸彦さんにはわかった。伸彦さんはゆっくりと振り返り、アカシアの森で抱きしめた時のような気持ちで麻子さんの目を見た。

45 「あの……勉強したんですよ、鳥のこと。それで今日はちよつと、うんちくを語ります。なぜ、あれだけの数の……何百何千
というカモが大陸から渡ってきて、日本の川や湖で越冬するかわかります？」

麻子さんは伸彦さんの胸のあたりに目を落とし、「いいえ」と首を横に振った。

「もちろん、海を渡ってくるのは、凍てつく大陸の冬を避けるためです。でも、それなら一羽一羽がばらばらにやってくる、

50 好きなどころで越冬すればいいでしょう。けれどもカモやハクチョウは、膨大な数の仲間たちとやってきました。それね……厳しい季節をとにも過ごしながら、相性の合う相手を探そうとするからなんです。冬の辛さのなかで、ようやく自分の伴侶がわかるんでしよう。だから、あれだけの数で飛んでくるんです。そしてそのなかから、一羽と一羽が互いに惹かれ合って……春になればついで海を越えて戻っていく」

うまく喋っていないような気がして、伸彦さんはカップのホットワインを口に含んだ。

55 「妻を亡くしたあと、ふさぎ込んだ息子といっしょに暮らしてきました。会社から帰ってくると、布団を敷いて寝ている息子がいて。その小さな背中を見ながら、僕は何度……」

伸彦さんの声はそこで一度途絶えた。

「ずっと真冬でした。息子と二人で冬ごもりしているようなものでした。でも、そんな時に鳥を観ることを始めて。そしてあなたと綾ちゃんがいっしょに時を過ごしてくれるようになった。できれば関西でいっしょに暮らせませんか。つまり、結婚を願ってはいけませんか？」

60 伸彦さんは頭を下げ、唇を噛んだ。胸を上下させている麻子さんのその気配だけが伝わってきた。再び沈黙が訪れた。すぐるような思いで伸彦さんは顔を上げた。すると突然、ガア、ガアと浴びせるような声でした。前触れなしだった。声はいくつも重なり、やがて無数の響きとなってふくらんだ。空気が震えている。

「お父さん、すごいよー！」

「お母さん、早く、外！」

65 子供たちが川原で叫んでいる。麻子さんは伸彦さんの顔を一度見ると、何か言いかけ、そのままテントの外へと出ていった。伸彦さんは動けなかった。

「伸彦さん！ すごいっ！」

いきなり暗くなったテントのなかで、伸彦さんは麻子さんの声を聞いた。慌ててカメラを持ち出し、外に出た。降りしきる雪のなか、カモの大編隊が旋回していた。膨大な数の命が帯のように舞い、崩れては立て直し、密集しては散開し、空を万華鏡に変えていた。カモたちは先行組から次々と川へ降りてくる。翔君と綾ちゃんがそこに向けて走りだした。麻子さんと伸彦さんも子供たちのあとに続いた。

「私、あなたにそれを言ってもらおうのをずっと待っていたんです」
前に行く子供たちから麻子さんは目を離さなかった。だが、言葉は横に行く伸彦さんにまっすぐ向かっていた。

「私もそれを望んだんです。でも、気になることがあつて弁護士の方に相談しました」
「弁護士？」

「私と伸彦さんがもしも夫婦になったら、将来あの子たちが好きどうしになった時、どうなるんだろうって……」
一瞬、カモの声が伸彦さんから遠ざかった。

「法的には問題ないということでした。義理の兄妹でも、血縁がなければ結婚はできるんですって。だけど、やっぱりいっしょに暮らせば、お互いにそれは避けるようになるだろうって」

80 翔君と綾ちゃんはすでに水辺に到達し、「早く！」と手を振っている。

「だから、もしあなたの気持ち、⑩のように本当にしっかりとしたものならば、一生のお願いがあるんです」
麻子さんが立ち止まった。冬の空の光をすべて貯えたような瞳で伸彦さんを見た。

「あの二人が大人になって、どちらかに決まった相手が現れたら、その時こそ私といっしょになってください。それまではいっしょにいても、互いに綾の母親、翔君の父親ということで耐えてもらえませんか」

85 伸彦さんはしばらく目だけを瞬かせていたが、やがて声を発せずにならずいた。

「その時、私は五十を過ぎているかもしれませんが。それでも花嫁にしてもらえますか」

「はい」

自身想像もしていなかった言葉が、続いて伸彦さんからこぼれ出た。

90 「それなら……新婚旅行はシベリア鉄道に乗って、バイカル湖に行きましょう。このカモたちの夏の姿を見に」
そこへ翔君の声。

「早く！ 何してんの！」

降りてくる無数のカモを背景に、子供たちが躍はなっている。伸彦さんと麻子さんは息を弾はませながらそこに辿たどり着いた。翔君に促うながされ、伸彦さんは広がり始めたカモの群れにカメラを向けた。

だが、数枚撮ったところでそれをやめた。望遠レンズをはずし、標準に替える。石の上でカメラを固定する。

95 「何、どうしたの？」

「みんな、そこにいて」

驚いた顔の子供たちと麻子さんを、伸彦さんは川原に並ばせた。そしてカメラのセルフタイマーをセットした。

「四人で撮ろう」

100 みんなのもとに駆け寄りながら、伸彦さんは「これから毎年撮るぞ」と叫んだ。そして照れた顔になった翔君を片手に抱いた。笑わらいだした綾ちゃん①の肩をも抱いた。麻子さんはすぐそばで目尻めじりを押さえている。伸彦さんはその横に立った。背後で、雪を舞わせて次々と、越冬のカモたちが降りてくる。

（あきかわてつや明川哲也「越冬」『大幸運食堂』（PHP研究所）所収、より）

注 1 諷いさまめる——いましめる。禁止する。

問 1 ——— 線部①「否定できない情熱と、それを消そうとする自分が絡み合った」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 父母そろった家族を再び作りたいという思いがあるが、翔君や綾ちゃんの考えを聞いていない現状では難しいと悩んでいるということ。

イ 麻子さんと結婚したいという強い思いがあるが、子供たちのことを考えるとその思いを行動に移してはいけなさと悩んでいるということ。

ウ 麻子さんとできたら結婚したいという思いがあるが、亡くなった妻や翔君のことを考えるとそうもできないだろうと悩んでいるということ。

エ 父母そろった家族を再び作りたいという強い思いがあるが、自分とは血のつながっていない綾ちゃんのことを考えると自信がないと悩んでいるということ。

問 2 ——— 線部②「それは想像もしていなかったところから、避け切れない力となってやってきた」とは具体的にどのようなことを言っていますか。それを説明した次の文の空欄 A・B に適切なことばを入れて完成させなさい。ただし、A は二字で、B は五字以内で書くこと。

A から B が出たこと。

問 3 ——— 線部③「翔、そろそろカモを観に行かないとな」とありますが、伸彦さんが翔君にこのように言った本当の理由は何ですか。それを説明した次の文の空欄に適切なことばを十字以上二十字以内で入れて完成させなさい。

伸彦さんが から。

ア 伸彦さんの突然の転勤の話に驚き、伸彦さんと離れてしまうことは仕方のないことだと大人として理解はできるものの、まだ子供の娘は悲しむことになるだろうとただ娘のことだけを気がかりに考えている。

イ 伸彦さんの突然の転勤の話に驚き、どうしてその転勤の話を通らなかつたのかと思いつつも、大人はともかく子供たちのよい関係だけはこれからも続けていける方法が何かないものかと模索しようとしている。

ウ 伸彦さんの突然の転勤の話に驚き、このまま離れてしまいたくないという気持ちがあるものの、それを率直に表明することもできず、娘が悲しむと言うことによつてかろうじて自分の気持ちを示そうとしている。

エ 伸彦さんの突然の転勤の話に驚き、このまま関係を断とうとしている伸彦さんの態度に怒りをおぼえつつ、また、ここまで仲良くなった翔君と娘が離れることになれば娘が悲しむことになるかと非難の気持ちを示そうとしている。

問 7 — 線部⑧「結婚を願つてはいけませんか？」という伸彦さんの思いに対する麻子さんの答えとなつている一文を本文中から探し、最初の五字を答えなさい。

問 8 — 線部⑨「空を万華鏡まんげきょうに変えていた」に使われている表現技法(修辞法)として最も適切なものを次のア、イの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 直喩法ちよくゆ イ 隱喩法いんゆ ウ 擬人法 エ 対句法

問 9 — ⑩に入れる語句として最も適切なものを次のア、イ、ウの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 冬の空の光 イ 冬を越える鳥 ウ 川原に積もる雪 エ 秋のアカシアの森

問 10 — 線部⑩「笑いだした綾ちゃんの肩をも抱いた」は、伸彦さんが悩んでいたある問いの答えになっています。その問いを表わしている一文を本文中より探し、最初の五字を答えなさい。

問11

この作品の表現の説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 伸彦さんの視点で物語が進行しており、そこにカモの情景描写も加わって、奥行きのある作品となっている。

イ 鳥が作品の中で重要な意味を持っており、それを読者に印象付けるため擬音語が多用されて、臨場感のある作品となっている。

ウ カモが伸彦さんの気持ちを代弁するかのよう描かれており、現実と願望と、自然と人間とがうまく溶け合った作品となっている。

エ 伸彦さんと麻子さんとの間の思いを中心にしながら、子供たちも含めた四人の視点で物語が語られていて、重層的な作品となっている。

